

むさしの 紀行人

その時代を生きた証人が
語る武蔵野の歴史

武蔵境の始まりは境村分水。
人々の暮らしは
分水路とともにあった

飲み水に乏しかった武蔵境は、境村分水によって飲み水が供給されるようになった地域です。今はその水路のほとんどが埋め立てられて道路になったり、住宅の敷地に変わっていますが、私の子どももの頃、昭和20年前後は町中を小さな分水路が巡り、野菜や食器を洗ったり、防火用水にしたり、人々はその水を日々の生活に利用していました。もっと以前には、自宅に水を引き入れて池を作り、飲み水として使っていたんですね。こうした武蔵境の原風景とも言えるべき境村分水を中心に、昔のお話

武蔵境の80年



昭和28(1953)年頃の武蔵境駅前商店街(現在のすきっぷ通り)。
電車を降り、この景色を見ると「地元に戻ってきた」と感じていた

武蔵境にはかつて「境村分水」という玉川上水の分水路が町中を巡っていたのをご存じでしょうか。昭和12年生まれの良島賢亮さんは、武蔵境に暮らして80年。市が開講する「水環境講座『水の学校』」の受講生となったことをきっかけに、「境村分水を考える会」を発足しました。良島さんに境村分水を中心に、昔のまちの様子を語ってもらいました。



ながしまけんすけ
良島賢亮さん(81歳)

昭和12年渋谷区笹塚生まれ。昭和35年中央大学を卒業後、証券会社を経て土地開発会社に勤務。不動産鑑定評価業務に従事し、評価対象地が属するまちや地域の変化に興味を持つようになる。現在は「水の学校」サポーター、「境村分水を考える会」会員。

さまざまな生き物が生息し、
子どもたちの
遊び場でもあった

をしてみたいと思います。

私は昭和12(1937)年に笹塚で生まれ、翌年武蔵境に引っ越してきました。「静かでよいところ」と聞いてのことだったそうです。今のスイングビル西方の、駅からほど近い住宅地で、高橋浅五郎さんという大きな農家の家作の一角でした。そばには大家さんの屋敷林が広がり、遊びに行くときと気のいい大家のおばあさんが出てきて、「ホレ、網を貸せ!」と言ってアブラゼミを捕ってくれます。なんともどかな時代でした。言葉遣いも「おれ・おめえ」そ

うだんべえ」。

昭和18(1943)年に現在の小学校にあたる国民学校に入学しました。太平洋戦争の真っ最中でしたが、子どもの自分にはそれほど緊迫した感覚はありませんでした。ただ、実際には勉強どころではなかったです。夏の暑い時に上級生と二人一組になって、「軍馬のエサ」を供出するため分水路や線路の脇に生えているカヤを刈りに行ったりしました。

昭和20(1945)年、3年生の夏休みに終戦を迎えます。駅前商店



武蔵野村の地図(大正14年製図)に良島さんが水路を明記したもの

街、現在のすきっぷ通り商店街にも少しずつ商品がそろうようになり、ある時中学生の兄に『リーダーズ・ダイジェスト(アメリカの月刊誌)』を買ってきてくれ』と頼まれました。商店街のクララ館(書店)へ行くと、店主が「こんな小さい子どもでもこんな本を読んだぞ。新しい時代が来た。勉強しなければ…」と店員に話していたのが、終戦後の思い出として残っています。

子どもたちは自由に遊びまわるようになり、私たちが遊ぶ地域の中には必ず分水路がありました。第二小学校の前を流れる水路は「第二の川」、下流に竹林とかごを作る作業場があった脇の水路は「竹屋の川」、現在の第六中学校の前で分かれた水路は「品川用水」でしたので「しなんぼり」。こうやって勝手に名前をつけ、分水路で泳いだり、魚を見つけたり、水路沿いをただ歩くだけで楽しかったですね。分水路にはオタマジャクシやカエル、エビ、ドジョウ、小ブナ、ダボハゼなどいろいろな生き物がいて、昭和30(1955)年頃まではホタルを見ることもできました。これは調査を始めてから聞いたことですが、「シジミをとって食べ

た」鮎がとれた」という証言もあります。ちなみに私たちが「竹屋の川」と呼んでいたところの上流部は現在「花の通学路」として整備されています。

分水路には歴史的価値が。武蔵野の未来のために伝えていくことが使命

日本が高度経済成長期に入ると武蔵野の人口も増えていき、分水路に生活排水が流されるようになり徐々に水が汚れていきました。下水道の整備が追いつかず、分水路がその代わりに使われてやがてドブ川と化し、一部はゴミ捨て場にもなってしまうのです。そして道路拡張や宅地の造成などで埋め立てられ、今はその痕跡を探すのも難しくなってきました。

中国に「飲水思源」という言葉があります。「水を飲む者は、その源を思いなさい」という意味から、「物事の根本を忘れない」「お世話になった人の恩を忘れないこと」などの教訓として使われます。今日の武蔵野の歴史は、境村分水とともにあったと言っても過言ではありません。そ

うした思いから「境村分水を考える会」をつくり、分水路の跡地を調査したり、古老に昔の水路の話や聞くなど、その歴史的価値を後世に伝えていきたいと思っています。それはきっと、武蔵野が今後さらに魅力的なまちとして発展するための糸口になると信じています。

PICK UP SPOT

良島さんが市内のお気に入りスポットを紹介してくれました。

花の通学路

「かつてはここにも水路が通っていたと思いをせせると、とても感慨深いものがあります」

(境5丁目)

